

博士論文

論文題目 近代日本の宗教学思想と国家
—「新宗教」理想と国民教育の交錯—

氏 名 前川 理子

近代日本の宗教学思想と国家 ——「新宗教」理想と国民教育の交錯——

目次 頁

第1章 本論文の目的と課題

1) 関心の所在	1
2) 課題の設定および先行研究	2
3) 視点と方法	8
4) 用語および章構成	11

第 I 部 宗教学思想と国民教育への展開

第2章 井上哲次郎における宗教と国民道德——哲学的宗教・倫理・国体

第1節 教育勅語と明治憲法——二重規範と宗教的中立性	17
第2節 哲学的宗教と国家主義——倫理の大本・勅語衍義・倫理的宗教	19
1) 普遍の軸——明治20年代前半	19
2) 教育と宗教の衝突論(明治26年)——国家主義への傾斜	22
3) 「将来の宗教」構想——明治30年代前半	24
4) 「新宗教」論争——仏教学者を中心に	27
第3節 国民道德論の形成——国家主義から国体主義へ	31
第1項 『国民道德概論』——国家主義の特殊化と理想化	31
1) 日本民族特有の精神	31
2) 理想的国体道德と「神道」の登場	35
第2項 穂積・吉田の国民道德論をまじえて——明治期国民道德論の特徴	39
1) 穂積八束の国民道德論	39
2) 吉田熊次の国民道德論	41
3) 明治終期の国民道德論——三者比較から	42

第3章 「新宗教」の模索——人格修養・宗教的情操・英雄崇拜と宗教学

第1節 宗教の「批評的建設」時代——新宗教思潮と初期宗教学	44
-------------------------------	----

第1項 「新宗教」という主張	44
1) 仏キ接近と「包括融合」	45
2) 脱宗派的な運動形態——雑誌メディアと非定期会合	49
3) 「新主義」台頭から「合同」の模索へ——「日本」を枠組として	55
第2項 初期宗教学の形成——「新宗教」を支える学知	66
1) 日本近代宗教学の黎明期	66
2) 姉崎宗教学の方法と思想	69
第2節 新宗教論における人格主義の浮上——宗教的倫理運動の展開	74
第1項 丁酉倫理会と「人格の修養」	75
1) 「新宗教」と「倫理」——成立宗教および道徳との隔たり	75
2) 丁酉倫理会における人格主義と国家主義	84
第2項 帰一協会へ——宗教的「信念」の再強調	86
第3節 人格修養から人格感化の宗教論へ——宗教的情操と英雄崇拜論を介して	90
第1項 宗祖の人格「感化力」	90
1) 英雄偉人の崇拜と宗教——カーライルに導かれて	90
2) 姉崎の宗祖論	95
3) 实在宗教と人格感化教——井上哲次郎、井上円了、村上専精らと比べて	99
第2項 宗教学的教育論と教育学的教育論——吉田熊次との対立	101
1) 宗教と教育(道徳)の関係をめぐって	102
2) 吉田の注入主義的訓練論——「科学的」道徳／宗教的道徳	105
3) 宗教学的宗教論への根本批判	107
第4節 超宗教的「新宗教」の実践	109
第1項 人格主義宗教の展開	109
1) 「実験」と「直観」——内なる神と体験主義	109
2) 組織脱却と諸教の調和——超宗教的宗教性へ	111
3) 文学・修養書における展開——偶像破壊と模範の同時参照	112
4) 超宗教性のゆくえ	114
第2項 松村介石と道会	115
1) 略歴	116
2) 「新宗教」思想運動としての道会	117
3) 社会正義・国家主義・皇室——宗教信仰との関係	123
第4章 宗教学者の国家論とその周辺——普遍的新宗教と国家的要請	
第1節 加藤玄智の「国家的神道」論——国体化する人格感化教	129

1) 「神道」論前夜における二つの出発点——「新宗教」と「天皇教」	131
2) 神道研究とその概要	138
3) メイキング・オブ・国家的神道 1——「国家的」であり「宗教」であること	146
4) メイキング・オブ・国家的神道 2——生祠研究と国家的神道論への妥協	148
5) 国民道徳と宗教——仏基併行から神皇拝戴へ	155
6) 小結	157
第2節 大川周明の人格宗教と日本論——普遍的宗教理想の日本の変奏	161
1) 中高時代・最初期の思想傾向——彼岸的宗教から此岸的人格宗教へ	163
2) 宗教学徒として——初期宗教学からの影響	165
3) 道会と政治的覚醒	173
4) アジア主義と日本精神論——「本然の性」の実現	178
5) 皇室観・神道観	184
6) 大東亜戦争の理念——日本精神論の本領発揮	192
7) 大川思想と宗教学	199
第3節 上杉慎吉の皇道論と国家哲学	205
1) 皇道の天皇論——皇位主権と現人神の救济信仰	205
2) 「国家我」論——臣民の自我実現	214
3) 天皇との政治宗教的「直結」——君民合一論とその実践	216
4) 国体的無政府主義への道	225
第4節 国体的宗教論の諸相	227
1) 天皇・皇室観に関わって	227
2) 神道・神社に関わって	229

第II部 体制の国家宗教論と宗教学思想

第5章 宗教教育論の帰趨——第一次大戦後から教学刷新までを中心に

第1節 課題と対象	235
第2節 宗教の教化利用観と人道主義宗教への憧憬——宗教教育導入論の台頭と背景	236
1) 内務文部二省における宗教利用と宗教忌避	236
2) 臨時教育会議——宗教教育導入論の先駆け	238
3) 宗教教育推進運動の展開——大正期思潮の二側面につうじて	243
第3節 宗教教育協議会から文部次官通牒へ	251
1) 諮問内容および委員構成	252

2) 議論の経過と内容	254
3) 答申および次官通牒の考察——その異同を含めて	270
4) 小結——翻弄される宗教教育論	274
第4節 宗教的国体論の公然化と宗教教育論——教学刷新評議会・教育審議会	278
1) 議論の前提	279
2) 教刷評の答申および審議内容	282
3) 教育審議会における宗教教育論のゆくえ	297
第5節 小結	303
第6章 国家教学と宗教学思想の相克——国体論と人格主義をめぐる	
第1節 国体論の正統教学——その神話的宗教的拡大	309
1) 『国体の本義』における国体と臣民道	309
2) 「聖訓ノ述義ニ関スル協議会」における勅語述義の変更	314
3) 学校教育への反映	317
第2節 狹隘化する国体論・天皇論——加藤玄智と井上哲次郎の昭和	320
1) 加藤玄智における国体論の修正	320
2) 井上哲次郎不敬事件	323
3) 天皇論の諸位相	326
第3節 排撃される人格主義——大川周明の昭和と上杉皇道論	330
1) 『日本及日本人の道』批判	331
2) 『日本二千六百年史』と国家改造運動への批判	334
3) 「霸道」対「皇道」あるいは「捨石」の精神	340
終章	
1) 宗教学思想とその国家主義への展開: 課題①②——視点1	348
2) 国体論と宗教推進運動の帰趨: 課題③——視点2と3	350
3) 抽象的宗教性の脆弱さ——超宗教性が没超越性にむかうとき	354
4) 規範的宗教学の選択的不作為とその条件	362
引用・参考文献	364

本文は出版済みのため全文公表できません。

前川理子『近代日本の宗教論と国家——宗教学の思想と国民教育の交錯』東京大学出版会、
2015年、ISBN:9784130160346

引用・参照文献 ※註に挙げたものを除く

- 赤澤史朗（1985）『近代日本の思想動員と宗教統制』校倉書房
- 我妻栄編（1970a）『日本政治裁判史録 昭和・前』第一法規
- 編（1970b）『日本政治裁判史録 昭和・後』第一法規
- 浅野和生（1987）「上杉慎吉の国体論の陸軍将校への影響」『中部女子短期大学紀要』17
- 葦津珍彦（1990）『国家神道とは何だったのか』神社新報社
- 飛鳥井雅道（1994）「近代天皇像の展開」朝尾直弘他編『岩波講座 日本通史 17 近代 2』岩波書店
- 池田哲郎（1979）「住谷天来とカーライル『英雄崇拜論』」『学苑』472
- 石川晃司（1993）「大川周明における思想と政治」『湘南工科大学紀要』27-1
- 磯前順一・深澤英隆（2002）『近代日本における知識人と宗教』東京堂出版
- 栄沢幸二（1981）『日本のファシズム』教育社
- 大内三郎（1976）「松村介石研究序説」『日本文化研究所研究報告』12
- （1977）「松村介石」『内村鑑三研究』8
- 大久保利謙（1988）『大久保利謙歴史著作集』7（日本近代史学の成立）吉川弘文館
- 大久保利謙・海後宗臣監修（1970）『教育審議会諮問第一号特別委員会会議録』1～4、宣文堂書店
- ・——監修（1970～1971）『教育審議会諮問第一号特別委員会整理委員会会議録』5～14、宣文堂書店
- 大塚健洋（1995）『大川周明 ある復古革新主義者の思想』中公新書
- 沖田行司（1992）「国際化の論理と伝統主義」『日本近代教育の思想史研究』日本図書センター
- 小口偉一（1956）「宗教学五十年の歩み」『宗教研究』147
- 尾崎ムゲン（1984）「臨時教育会議と社会的教育要求」、「講座日本教育史」編集委員会『講座日本教育史』3、第一法規出版株式会社
- 海後宗臣編（1960）『臨時教育会議の研究』東京大学出版会
- 掛川トミ子編（1976）『現代史資料』42（思想統制）、みすず書房
- 片山杜秀（2006）「写生・随順・拝誦——三井甲之の思想圏」竹内洋・佐藤卓巳編『日本主義的教養の時代』柏書房
- （2007）「右翼と身体」同『近代日本の右翼思想』講談社
- 加藤正夫（1996）『宗教改革者・松村介石の思想』近代文芸社
- 刈田徹（1985）「道会機関誌『道』の「解題」ならびに「総目次」——大川周明に関する基礎的研究の一環として（その1）——」『拓殖大学論集』158
- （1986）「五高時代における大川周明の思想と行動に関する一考察」『拓殖大学論

集』161

- (1987) 「大正期猶存社系国家主義運動に関する一考察」『拓殖大学論集』170
- (2001) 『大川周明と国家改造運動』人間の科学社
- 川戸道昭 (1995) 「トマス・カーライルと明治の知識人——『英雄崇拜論』の受容をめぐって——」『英語英米文学』35
- 唐木順三 (1949) 『現代史への試み』筑摩書房
- 官田光史 (2004) 「国体明徴運動と政友会」『日本歴史』672
- 岸本芳雄 (1967) 「神道と国民道徳」神道文化会編『明治維新神道百年史』3、神道文化会
- 清家基良 (1995) 『戦前昭和ナショナリズムの諸問題』錦正社
- 近代日本教育制度史料編纂会編 (1956 a) 『近代日本教育制度史料』7、大日本雄弁会講談社
- 編 (1956b) 『近代日本教育制度史料』11、大日本雄弁会講談社
- 編 (1957 a) 『近代日本教育制度史料』14、大日本雄弁会講談社
- 編 (1957 b) 『近代日本教育制度史料』15、大日本雄弁会講談社
- 久野収・鶴見俊輔 (1956) 『現代日本の思想』岩波書店
- 久保義三 (1969) 『日本ファシズム教育政策史』明治図書
- (1979) 『天皇制国家の教育政策』勁草書房
- (1994) 『昭和教育史』上、三一書房
- 呉懷中 (2007) 『大川周明と近代中国』日本僑報社
- 國學院大學日本文化研究所編 (1997) 『宗教と教育——日本の宗教教育の歴史と現状』弘文堂
- 国立教育研究所編 (1973) 『日本近代教育百年史』1 (教育政策 1)、教育研究振興会
- 編 (1974) 『日本近代教育百年史』7 (社会教育 1)、教育研究振興会
- 小沢熹 (1984) 「教育審議会による国家総動員体制下の教育改革」、「講座日本教育史」編集委員会『講座日本教育史』4、第一法規出版株式会社
- 小林健三 (1976) 「加藤玄智博士の学績」『神道研究紀要』1
- 子安宣邦 (2000) 「近代「倫理」概念の成立とその行方」『思想』912
- 小山常実 (1989) 『天皇機関説と国民教育』アカデミア出版会
- 相良亨 (1998) 『誠実と日本人』増補版、ペリかん社
- 佐藤秀夫編 (1994・1996) 『続・現代史資料』8・9 (教育 1・教育 2) みすず書房
- 塩出環 (2005) 「三井甲之と原理日本社の大衆組織——「しきしまのみち会」の場合」『古家実三日記研究』5
- 篠田一人 (1964) 「明治以降の日本における宗教の学問的研究の推移」『キリスト教社会問題研究』8
- 島藺進 (1995) 「加藤玄智の宗教学的の神道学の形成」『明治聖徳記念学会紀要』(復刊) 16

- (1998) 「日本における『宗教』概念の形成 —井上哲次郎のキリスト教批判をめぐって—」山折哲雄・長田俊樹共編『日本人はキリスト教をどのように受容したか(日文研叢書 17)』国際日本文化研究センター
- (2000) 「国民的アイデンティティと宗教理論 —井上哲次郎の宗教論と「日本宗教」論—」アンヌ・ブッシイ、脇田晴子共編『アイデンティティ・周縁・境界』吉川弘文館
- 島菌進・高橋原・前川理子 (2004) 「解説」同監修『加藤玄智集』9、クレス出版
- 下田正弘 (2006) 「近代仏教学の展開とアジア認識」『岩波講座 「帝国」日本の学知』3、岩波書店
- 鈴木範久 (1979) 『明治宗教思潮の研究—宗教学事始—』東京大学出版会
- (2005) 「宗教学研究者の社会的発言」『宗教研究』343
- 鈴木正節 (1985) 「道会と大川周明」『武蔵大学人文学会雑誌』17-1
- 鈴木正幸 (1993) 『皇室制度』岩波書店
- (2000) 『国民国家と天皇制』校倉書房
- 鈴木美南子 (1979) 「近代日本における宗教と教育の関係(上)」『フェリス女学院大学紀要』14
- (1980) 「近代日本の教育における宗教の意義に関する覚え書き」『フェリス女学院大学紀要』15
- (1986) 「天皇制下の国民教育と宗教」伊藤彌彦編『日本近代教育史再考』昭和堂
- 「戦時教学」研究会編 (1991) 『戦時教学と真宗』2、永田文昌堂
- 大日本宗教家大会事務所編 (1904) 『宗教家大会彙報』金港堂
- 高橋正衛編 (1963・1964・1974) 『現代史資料』4・5・23 (国家主義運動 1・2・3)、みすず書房
- (2003) 『昭和の軍閥』講談社
- 高橋穰 (1939) 「倫理運動」『教育学辞典』4、岩波書店
- 高橋陽一 (1998) 「宗教的情操の涵養に関する文部次官通牒をめぐって」『武蔵野美術大学研究紀要』29
- 竹内洋 (1999) 『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社
- (2003) 『教養主義の没落』中央公論新社
- (2004) 「蓑田胸喜伝序説」竹内他編『蓑田胸喜全集』1、柏書房
- (2006) 「帝大肅清運動の誕生・猛攻・蹉跌」竹内他編『日本主義的教養の時代』柏書房
- 竹内好 (1975) 「大川周明のアジア研究」『近代日本思想大系 21 大川周明集』筑摩書房
- 武田清子 (1961) 「キリスト教受容の方法とその課題—新渡戸稲造の思想をめぐって—」

- 同編『思想史の方法と対象』創文社
- (1987)『日本リベラリズムの稜線』岩波書店
- 竹中信常 (1979)「特集・日本宗教学の人々」『大正大学宗教学年報』21
- (1984)「日本宗教学の軌跡」『宗教研究』259
- 田辺勇 (1954)「外篇 学田拾穂」加藤玄智『学校教育と成層圏の宗教』幽頭社
- 田丸徳善編 (1982・1985)『日本の宗教学説』・『同Ⅱ』、東京大学宗教学研究室
- (1984)「日本における宗教学説の展開」坪井俊映博士頌寿記念会編『仏教文化論攷』仏教大学
- (1995)「加藤玄智論試稿」『明治聖徳記念学会紀要』14
- 津城寛文 (1985)「加藤玄智—穏健中庸なる天皇教徒—」田丸徳善編『日本の宗教学説Ⅱ』東京大学宗教学研究室
- 筒井清忠 (1995)『日本型「教養」の運命』岩波書店
- 編 (2010)『解明・昭和史』朝日新聞出版
- 寺崎昌男 (1984)「概説」、「講座日本教育史」編集委員会『講座日本教育史』4、第一法規出版株式会社
- 同志社大学人文科学研究所編 (1996)『近代天皇制とキリスト教』人文書院
- 土肥昭夫 (1967・1969)「三教会同—政治、教育、宗教との関連において—」(一) (二)『キリスト教社会問題研究』11・14=15 合併号
- 富坂キリスト教センター編 (1996)『近代天皇制の形成とキリスト教』新教出版社
- 編 (2001)『大正デモクラシー・天皇制・キリスト教』新教出版社
- 編 (2007)『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』新教出版社
- 友枝高彦 (1933)「欧米における倫理運動」『岩波講座 教育科学』20
- 長尾龍一 (1974)「穂積八束」潮見俊隆・利谷信義編『日本の法学者』日本評論社
- (1981)『日本法思想史研究』創文社
- (1982)『日本国家思想史研究』創文社
- (1996)「穂積八束」『日本憲法思想史』講談社
- 中瀧邦 (1986)「婦一協会小考 (一) —その成立を中心に—」『日本女子大学紀要』36
- (1987)「婦一協会小考 (二) —その初期の活動を中心に—」『日本女子大学紀要』37
- 中濃教篤編 (1977)『講座日本近代と仏教6 戦時下の仏教』国書刊行会
- 中村紀久二 (1987)『復刻国定歴史教科書解説』大空社
- (1990)『復刻国定修身教科書解説』大空社
- 編 (2008)『復刻版国定教科書編纂趣意書』6、国書刊行会
- 新田均 (1997)『近代政教関係の基礎的研究』大明堂
- 日本思想史懇話会 (2008)「特集・近代日本と宗教学」『季刊日本思想史』72

- 日本宗教学会 (2005) 「公開シンポジウム・日本の宗教研究の百年」『宗教研究』343
- 日本宗教学会「宗教と教育」に関する委員会編 (1985) 『宗教教育の理論と実際』鈴木出版
- 野口武彦 (1979) 『江戸の歴史家』筑摩書房
- 野間教育研究所蔵本 (2006) 『教学刷新評議会資料』上下、芙蓉書房出版
- 橋川文三編 (1964) 『現代日本思想体系 31 超国家主義』筑摩書房
- (1975) 「解説」『近代日本思想大系 21 大川周明集』筑摩書房
- 長谷川正安 (1974) 「上杉慎吉」潮見俊隆・利谷信義編『日本の法学者』日本評論社
- 秦郁彦 (2012) 『軍ファシズム運動史』復刻新版、河出書房新社
- 林淳 (2008) 「宗教系大学と宗教学」『季刊日本思想史』72
- 久木幸男他 (1980) 「「教育と宗教」第二次論争」同『日本教育論争史録』1・近代編 (上)、第一法規出版
- 比屋根安定 (1925) 『日本宗教史』三共出版社
- (1941) 『宗教史』現代日本文明史第 16 卷、東洋経済新報社
- 平田諭治 (1991) 「吉田熊次の道德教育論形成における留学体験の意味」『広島大学教育学部紀要 第一部』40
- 平山洋 (1989) 『大西祝とその時代』日本図書センター
- 蛭田道春 (2005) 『わが国における社会教化の研究』日常出版
- 深澤英隆 (1982) 「宗教学史の中の波多野精一」田丸徳善編『日本の宗教学説』東京大学宗教学研究室
- (1985) 「宗教学における心理主義・心理学主義の問題」田丸徳善編『日本の宗教学説Ⅱ』東京大学宗教学研究室
- 藤井健志 (1985) 「東京大学宗教学科年譜資料 (大正時代)」田丸徳善編『日本の宗教学説Ⅱ』東京大学宗教学研究室
- 船山信一 (1959 a) 「新宗教論争」『明治哲学史研究』ミネルヴァ書房
- (1959 b) 「日本的観念論の確立」『明治哲学史研究』ミネルヴァ書房
- (1965) 『大正哲学史研究』法律文化社
- 堀尾輝久 (1987) 『天皇制国家と教育』青木書店
- マイニア, リチャード (1971) 『西洋法思想の継受——穂積八東の思想的考察』東京大学出版会
- マイネッケ, F. (1967・1968) 『歴史主義の成立』上下、筑摩書房
- 松村介石 (1926) 『信仰五十年』道会事務所
- 松村介石伝編集委員会 (1989) 『松村介石』道会
- 松本健一 (2004) 『大川周明』岩波現代文庫
- 松本三之介 (1969) 『天皇制国家と政治思想』未来社

- 丸山真男 (1961) 『日本の思想』 岩波書店
—— (1999) 『丸山真男講義録』 5、東京大学出版会
- 見田宗介 (1971) 『現代日本の心情と論理』 筑摩書房
- 三井須美子 (1990) 「家族国家観による「国民道徳」の形成過程 (その1)」 『都留文科大学研究紀要』 32
- 南茂 (1933) 『宗教大観』 読売新聞社
- 宮川透 (1974) 「日本思想史における《修養》思想——清沢満之の「精神主義」を中心に」
『日本思想史の課題』 紀伊国屋書店
- 宮田登 (1970) 『生き神信仰一人を神に祀る習俗』 塙書房
- 向井清 (2002) 『トマス・カーライル研究』 大阪教育図書
- 村上重良 (1970) 『国家神道』 岩波書店
- 森川輝紀 (1987) 『近代天皇制と教育』 梓出版社
—— (1991) 「解説」 『修身科講義録』 大空社
—— (2003) 『国民道徳論の道』 三元社
- 文部省 (1979) 『資料臨時教育会議』 1～5、文部省
—— (1987) 『復刻国定歴史教科書』 大空社
- 文部省普通学務局 (1937) 『宗教教育協議会議事要項』 文部省
- 安津素彦 (1954) 「『明治・大正・昭和神道書籍目録』と『欧文神道書籍目録』」 『神道学』
1
- 安丸良夫 (1992) 『近代天皇像の形成』 岩波書店
- 柳田泉 (1949) 「はしがき」 カーライル 『英雄及び英雄崇拜』 春秋社
- 山口和孝 (1979) 「文部省訓令第十二号(1899年)と「宗教的情操教育ノ涵養ニ関スル」文
部次官通牒(1935年)の歴史的意義について」 『国際基督教大学学報. I-A, 教育研究』 22
—— (1980) 「「宗教的情操」教育の概念と史的展開」 『季刊科学と思想』 35
- 山田洸 (1972) 「井上哲次郎と国民道徳論」 『近代日本道徳思想史研究』 未来社
- 行安茂 (1980) 「日本における T.H.グリーン の受容」 『哲学』 32
- 吉田久一 (1959) 「新仏教運動と二十世紀初頭社会の諸問題」 『日本近代仏教史研究』 吉川
弘文館
- 吉田博司 (1993) 『近代日本の政治精神』 芦書房
- 米田利昭 (1960・1961) 「抒情的ナショナリズムの成立——三井甲之 (1) ～ (3)」 『文学』
28-11・29-2・29-3
- 老田三郎 (1949) 「あとがき」 カーライル 『英雄崇拜論』 岩波書店
- 和歌森民男 (1982) 「国民科の中の国史教育」 加藤章他編 『講座歴史教育』 1、弘文堂
- 脇本平也 (1984a) 「明治の新仏教と宗教学」 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会編 『宗教
文化の諸相』 山喜房仏書林

- (1984 b) 「日本における比較宗教の伝統」『宗教研究』 259
- (1989) 「今岡信一良における比較宗教の実験」『大倉山文化会議研究年報』 1
- (1990) 「今岡信一良における自由宗教と帰一の思想」『同上』 2
- (1991) 「今岡信一良の宗教教育論と国際自由宗教運動」『同上』 3
- (1994) 「今岡信一良における比較宗教の研究と宗教帰一の思想」『同上』 4
- (1995) 「今岡信一良における比較宗教の研究と宗教帰一の思想 (続)」『同上』 7
- (1998) 「比較宗教学と応用宗教学」『同上』 9
- 渡辺治 (1979) 「天皇制国家秩序の歴史的研究序説」『社会科学研究』 30-5
- 渡辺かよ子 (1990) 「1930年代の教養論に関する基礎的考察」『名古屋大學教育學部紀要
教育学科』 37
- 渡部清 (1999) 「日本主義的形而上学としての「現象即實在論」」『哲学論集』 28

その他本文中に用いた文献

<井上哲次郎の著作> ※論文は註に記した

- 『倫理新説』文盛堂、明治 16 (1883) 年
- 『内地雑居論』哲学書院、明治 22 (1889) 年
- 『勅語衍義』井上蘇吉ほか、明治 24 (1891) 年 (国民精神文化研究所『教育勅語渙発関係資料集』 3、国民精神文化研究所、1939 年、所収)
- 『教育と宗教ノ衝突』敬業社、明治 26 (1893) 年
- 『倫理と宗教との関係』富山房、明治 35 (1902) 年
- 『巽軒講話集』初篇、博文館、明治 35 (1902) 年
- 『巽軒講話集』第二篇、博文館、明治 36 (1903) 年
- 『倫理と教育』弘道館、明治 41 (1908) 年
- 『国民道德概論』三省堂、明治 45 (1912) 年
- 『神道の特長に就いて』大倉精神文化研究所、昭和 8 (1933) 年

<加藤玄智の著作> ※論文は註に記した

- 『宗教新論』博文館、明治 33 (1900) 年
- 『宗教の将来』法蔵館、明治 34 (1901) 年
- 『通俗東西比較宗教史』有明館、明治 36 (1903) 年
- 『我建国思想の本義』目黒書店、明治 45 (1912) 年
- 『神人乃木将軍』菊池屋書店、大正元 (1912) 年
- 『真修養と新活動』広文堂、大正 4 (1915) 年
- 『我が国体と神道』弘道館、大正 8 (1919) 年

『神道の宗教学的な新研究』大鏡閣、大正 11 (1922) 年
『東西思想比較研究』京文社、大正 13 (1924) 年
『我が国体の特色と敬神の真意義』愛国社、大正 13 (1924) 年
『神道講座 (2) 神道篇』四海書房、昭和 4~6 (1929~31) 年 (「世界宗教史上に於ける
神道の位置」所収)
『本邦生祠の研究』明治聖徳記念学会、昭和 6 (1931) 年
『日本人の国体信念』文録社、昭和 8 (1933) 年
『神社問題の再検討』雄山閣、昭和 8 (1933) 年
『神道の宗教發達史的研究』中文館書店、昭和 10 (1935) 年
『神道精義』大日本図書、昭和 13 (1938) 年
『神道書籍目録』明治聖徳記念学会、昭和 13 (1938) 年
“A Glimpse of the Shinto Pistology of the Nogi Shrine” Nogi Shrine, 1951
『学校教育と成層圏の宗教』幽頭社、昭和 29 (1954) 年
『知性と宗教』錦正社、昭和 31 (1956) 年
『我が行く神の道』乃木神社社務所、昭和 34 (1959) 年

<大川周明の著作> ※論文は註に記した

『大川周明集』(近代日本思想大系 21) 筑摩書房、1975 年
(以下、所収。底本の出版社・出版年を示す)
『日本精神研究』行地社、昭和 2 (1927) 年
『安楽の門』出雲書房、昭和 26 (1951) 年
『大川周明全集』全 7 巻、大川周明全集刊行会編・岩崎学術出版社、1961~1974 年
(以下、所収。目次順に各巻収録の底本の出版社・出版年を示す)
第一巻
『日本及日本人の道』行地社、大正 15 (1926) 年
『日本的言行』行地社、昭和 5 (1930) 年
『国史概論』行地社、昭和 4 (1929) 年
『日本二千六百年史』第一書房、昭和 14 (1939) 年
第二巻
『復興亜細亜の諸問題』大鏡閣、大正 11 (1922) 年
『亜細亜建設者』第一書房、昭和 15 (1940) 年
『印度に於ける国民運動の現状及び其の由来』私家版、大正 5 (1916) 年
『米英東亜侵略史』第一書房、昭和 17 (1942) 年
『大東亜秩序建設』第一書房、昭和 18 (1943) 年

「亜細亜・欧羅巴・日本」大正 14 (1925) 年 (『大東亜秩序建設』所収)
『新亜細亜小論』日本評論社、昭和 19 (1944) 年
『新東洋精神』新京出版株式会社、昭和 20 (1945) 年
「アジア及びアジア人の道」(『新東洋精神』(附)として)、『復興アジア論叢』国際日本
協会、昭和 19 (1944) 年

第三卷

『中庸新註』大阪屋号書店、昭和 2 (1927) 年
『宗教論』遺稿
『宗教原理講話』東京刊行社、大正 9 (1920) 年

第四卷

『日本文明史』(第 26 章～第 28 章) 大鏡閣、大正 10 (1921) 年
『時事論集』猶存社時代以降の小論文を編纂

第七卷

『回教概論』慶応書房、昭和 17 (1942) 年
『道 大川周明道德哲学講話集』書肆心水、2008 年
(以下、所収)
『人格的生活の原則』東京宝文館、大正 15 (1926) 年
『中庸新註』大阪屋号書店、昭和 2 (1927) 年
『大川周明日記』岩崎学術出版社、1986 年
『大川周明関係文書』同刊行会編・芙蓉書房出版、1998 年

<上杉慎吉の著作> ※論文は註に記した

『帝国憲法』日本大学、明治 38 (1905) 年
『国民教育 帝国憲法講義』有斐閣、明治 44 (1911) 年
『帝国憲法述義』有斐閣書房、大正 3 (1914) 年
『国体憲法及憲政』有斐閣書房、大正 5 (1916) 年
『議会政党及政体』有斐閣書房、大正 5 (1916) 年
『訂正増補 帝国憲法述義』有斐閣書房、大正 5 (1916) 年
『国体精華乃發揚』洛陽堂、大正 8 (1919) 年
『国家新論』敬文館、大正 10 (1921) 年
『新稿帝国憲法』有斐閣、大正 11 (1922) 年
『新稿憲法述義』有斐閣、大正 13 (1924) 年
『普通選挙の精神』敬文館、大正 14 (1925) 年
『億兆一心の普通選挙』中央報徳会、大正 15 (1926) 年

『政治上の国民総動員』日本学術普及会、昭和 2（1927）年

『憲法読本』日本評論社、昭和 3（1928）年

『日の本』（上杉正一郎編）上杉正一郎、昭和 5（1930）年

論文の内容の要旨

論文題目 近代日本の宗教学思想と国家 ——「新宗教」理想と国民教育の交錯——
氏 名 前 川 理 子

本論文は、宗教学の学問思想が近代日本にどのように形成され、また戦前戦中期の国家と教育をめぐる課題にどう向かいあったかについて明らかにする試みである。国家神道は宗教に非ずとされ、教育勅語を柱にする公教育が宗教との分離を大原則としたこの間、宗教学とこれに携わる人々（必ずしも大学アカデミズムに籍をおく人に限定しない）は、学問的知見を規範的に応用して宗教的国家論を展開し、あるいは国民教育に宗教的要素を加味すべきと論じて社会・国家に働きかけていった事実がある。だがこれまでは学説史的研究や宗教学者の人物研究はあっても、近代日本の国家—宗教関係あるいは国民教育史の流れに沿って、宗教学の学問思想を上の観点から吟味する試みはほとんど行われてこなかった。

そこで本論文では国家神道論や天皇制教育史における諸研究を手がかりに、近代日本の宗教学の学問思想の内容と特徴をふまえつつ、明治半ばに理想的「新宗教」の登場を期する一種の宗教学的な思想運動に発展されたそれが、近代日本の国民教育や国体をめぐる問題と交錯しながらどう展開したのかを通史的に探ることとし、以下の構成をもって進めた。

本論文は、序章にあたる第1章、第2章～第4章からなる第I部と第5章～第6章からなる第II部、そして終章をあわせた全7章により構成される。序章では上述の問題関心を述べるとともに先行研究を一瞥し、本論文の目的と課題、視点と方法、具体的な課題の設定をおこなった。

第I部「宗教学思想と国民教育への展開」では、前史として明治20年代以前の宗教界に現れた「新主義」と呼ばれた新動向を一瞥した上で、明治30年代に始動する宗教学の理論・思考枠組をひろく宗教学思想ととらえてその内容を明らかにし、それ

が社会、国家への関心を広げて宗教論・教育教化論的に展開する面をとりあげた。合理的倫理的社会的および脱宗派宗教＝通宗教的真理への志向に特徴づけられる斯学の理想的宗教観（「新宗教」論と呼ばれた）は、宗教でない「宗教的なもの」なる論理をもって学的ならびに倫理的方面に展開され（丁酉倫理会、帰一協会その他の活動）、また各種の修養運動や文学的宗教的諸現象として表出していった（第3章）。

この間具体的に行われた主張の例としては、先駆的論者として井上哲次郎（第2章）および姉崎正治、加藤玄智、大川周明らの宗教論国家論をとりあげた（第3章～第4章）。その共通点は、各派伝統の棄却や祖師論の転回を含みつつ、敬虔なる「信念」や「宗教的情操」に通宗教性（宗教の本質）をみる人格中心主義の代替的宗教観をうちだし、宗教的英雄偉人の感化力を助けに各人が直接神秘（大我、神、真如）につながる倫理的個人宗教の傾向をもって理想化する点、またこれを現実の国家体制や教育体制に調和的に重ね合わせようと努める点である。それらは政府当局の家族国家論一忠孝一本論に拠った国家観尊皇観、報本反始の神道的国民道徳を不足とする人々にアピールするいっぽう、比較の対象としてとりあげた上杉慎吉の皇道論などに比べてみれば、その主張の個々には普遍への志向ぬきがたく天皇絶対主義に抵触する部分があったり、普遍宗教の理想と国体や国民道徳の特殊的要請との間に無視しえない不整合を生じるなどの矛盾も目立った。

第Ⅱ部「体制の国家宗教論と宗教学思想」では、国家と宗教をめぐる政府当局の構想に宗教学思想がどのような交渉をもったかを探った。まず宗教(的)教育論としてその応用実践を求める動きに対し、どこまでそれが国家の意向に接近することになったのかを明らかにすべく、文部省等の各種審議会において文教政策上に彼らの主張がどう提案され、扱われたかを分析した（5章）。大正昭和に設置された臨時教育会議、宗教教育協議会、教学刷新評議会、教育審議会（姉崎に近い成瀬仁蔵、同僚の高楠順次郎、東大宗教学出身の矢吹慶喜、椎尾弁匡ら学者のほか同志的官僚・政治家らが委員を務めた）を具体的検討対象とした。彼らは、通宗教的新宗教論ないし感化的宗教情操論を根拠に、国内三教による教育貢献の可能性を説いて既成宗教の公教育参入を後押しした一方、天皇機関説事件後の国体明徴問題の急浮上による時局転換期には、国体観念の宗教化・天皇「本尊」教が全面展開されるのに同調した。

彼らの宗教教育論は全体的国家宗教との関係において曖昧さを免れず、その詰め甘さが露呈して国体宗教論に押し切られてしまうが、その経緯は宗教教育協議会以降の審議会でのやりとりに鮮明であった。臨時教育会議で成瀬が主張したような人道的宗教性・自律的な宗教的人格論を謳いあげる大正期の宗教教育論は、そののち宗教教育協議会で矢吹が述べたような凡愚的他力的信仰を主にする宗教教育論に、宗教的情操概念は没人格化した内容解釈にとって代わり、集団主義に埋没する臣民道の主張に合するものになった。三教のほとんどもこれ以降は国体宗教に順応して「皇国宗教」

の一翼として貢献する道を進んだのである。

この前後には同じ変化の波を井上、加藤、大川の国体論・国家宗教論も受けた。これが民間右翼の糾弾の対象にされていくことをみるとともに、その背景となった教育原理の時代的再編について、国家教学の正統を示した『国体の本義』とこれに続く国民学校令に至るまでの流れを分析した（第6章）。国家や国体を戴きつつも、起点において普遍宗教の理想や英雄論的人格主義を汲み、自律と靈性を重んじる人格的修養主義の唱道の中身としていた彼らの日本人論国家論は、個人主義や自由主義が反国体視されていく教学刷新の時代には国体主義として徹底を欠くとみなされ、修正を余儀なくされていったのである。

終章では本論文の成果を確認するとともに、宗教性の概念と近代日本の宗教学をめぐる一考察を加えた。新渡戸稲造の宗教的修養論や姉崎正治の靈性的征戦論にふれつつ、明治後期以降の修養的宗教論の国家癒着を論じ、敬虔性や「至誠」の信念に宗教的内実を縮減する抽象化空洞化された宗教性の論理は容易に、その超宗教性を没超越性に反転させ得たことを述べた。

以上において独自に得た見解の一つはまず、宗教学的理想に牽引された宗教(的)教育論が、体制的国体観の推移するに従い扱いを異にされる大きな流れを明らかにしたことである。明治末年の三教会同から昭和10年の宗教教育協議会—文部次官通牒発令に至るまでの既存宗教を中心とする宗教教育推進運動と、その後の現人神天皇崇拜の強化に特徴づけられる国体的宗教教育との関係は従来、次官通牒の両義性ともあいまって不分明であったが、これを解するには大正以降の体制思想の変転に連動して前者の宗教教育論の中身が動揺する過程に注目する必要があるがあった。

仏教キリスト教を用いる宗教教育論が国体観念を補強するものとして支持を得、普遍的信念論が国体の枠内で主張されるという一見不可解な現象がおきたのは、大正デモクラシー下に国体論や教育勅語が普遍的国際的な解釈を付された体制思想の弛緩期にあつてこそであった。共産主義流入の阻止という消極的理由ながら為政者側もこれに理解を示す。だが昭和に入つての満州事変の勃発や国際連盟脱退などに伴う日本の孤立化を背景に、体制思想が特殊的国体観念の公然化に舵を切り、国体論的一元化が教育勅語にも憲法解釈にも進行する時代を迎えて、宗教教育導入論—次官通牒は有名無実化され、あるいは言及されるときには逆に天皇教推進の根拠として転用されることになった。

宗教的情操概念の内容変遷をめぐって上述したように、この間、宗教教育論に与する宗教(学)者らの方でも、国家—宗教関係を前進させるためには当初の主張を翻してでも時代社会に順応妥協する一面をみせたことが注目された。ただし他方に宗教学思想は、大川やその他のケースにもみられたように、宗教の党派性独善性をしりぞけ宗

教的普遍性を重んじる批判精神の働くときには、絶対的日本主義の台頭や埋没主義への躊躇を育むことがあったことも知った。かく本論文では、国家国体をめぐる宗教学思想の社会・国家との関わり方の複層的なあり方を、時代背景や個々の主張に即してその可能性と限界につき具体的に明らかにしたことがもう一つの特徴であった。

宗教学思想を担った人々は世論への影響活動を積極的になし、諸教に通ずる宗教的真理とか人間本性に根づいた宗教的欲求の実現といった斯学の根本思想をアカデミズムの外にも拡大し、文教政策決定過程にも関わって公教育における宗教教育推進運動に切り結んでいった。だがその試金石となった昭和の国体明徴運動下には、「宗教的なもの」に期待される内容は為政者の新しく示した国体神学の要請に沿って一転したにもかかわらず、時局迎合的な応用性を発揮するほうに向かった。「宗教性非宗教」論は「神社非宗教」論や「国家神道非宗教」論に重ねられていった。

彼らの依拠した宗教性の概念が既成宗教を離れて単なる心情倫理と化し、国家的価値の攻勢に無防備であったこと、学問的営みとしても国家（国体）－宗教間の矛盾相克に関する積極的考究を欠いたことや、宗派的教団宗教に批判的な宗教学が各教独自の自律的活動に抑制的に働いたことが巡っては国家宗教の台頭に寄与したという視点も重要である。明治20年代の新宗教論が国家主義運動となる傾きに警鐘を鳴らし、教育勅語の陥穽を見抜いた大西祝ら最初期の一部の学者を除き、御用学問となった帝大宗教学はその後の国家的過程から自らを根本的に引き離すことはできなかった。引き継がれたという自由討究の精神はその対象から国家を外し、国家に合しながら国家自体を普遍化する（普遍的総合宗教の日本出現を論じ、皇国精神を世界指導的な普遍精神とみなす）ことで矛盾に目をつぶることの方を選んだのである。